

稲岡先生のまとめと謎解きからの学び

中嶋塾 Aチーム T

稲岡先生の授業を見た後、翌日に行われた打ち合わせでは、私のグループメンバーの鼻息は皆一様に荒かった。興奮冷めやらぬ、といった様相である。それほどまでに稲岡先生の授業は度肝を抜かれるものであった。しかし、蒔田先生の授業を見た時とは少し違う興奮を感じていた。それは、稲岡先生の授業の在り方から、授業とは一体何なのか、教師が授業を作るとはどういうことなのか、を考えさせられたからに他ならない。私もその一人である。合同研修会が終わった後、しばしの間、放心状態だった。「すごいものを目にしてしまった・・・」と、頭の中で何度も授業の様子が繰り返されていた。あまりにも興奮しすぎて、「もし自分だったら」と、稲岡先生を自分に置き換えた授業を、脳内で想像していた。「今の生徒とこんなふうにより取りをしながら授業を作れたら・・・」とワクワクしたが、「そのための土台作りが残りの期間で出来るのだろうか？」と、不安にさいなまれることにもなった。

今回の塾生が書いたレポートを拝読していても、皆、同様のことを感じていたのではないだろうか。稲岡先生の授業を一言で表すのは難しいが、レポートから見出せるキーワードを並べてみると、「生徒ファースト」「テストからの逆算」「自立的学習者」「心をつなぐ」「学習集団作り」「インプットとアウトプット」など、全体を俯瞰した計画性と、緻密な授業デザインを成立させるための生徒の実態把握と関係性作りに関わるものが目立つ。これは、「誰一人として取り残さない」という、稲岡先生の矜持が根底にあるからだろう。

稲岡先生の見ている世界は、私が見ている世界とは全く異なったものだった。今回私は、全体を俯瞰した計画性、つまり「鷹の目」で見ることと、生徒の実態把握と関係性作り、つまり「蟻の目」で見ること、の2点に集約して、自らの現在地と比較し、改善プランとしてのマイアクションを述べる。

(1) 「鷹の目」からの授業デザイン

私はテストを作るのが苦手である。それは、「結局、中学生はどこまで伸びるのか？」という疑問が常に頭をよぎり、「逆算すべき最終地点を見定められないからだ」、と勝手に思ってきた。そのため、学力テストの範囲表が授業進度の主な目安となり、学力テストまでに範囲を終えることで、アリバイ作りをしていたからに他ならない。だから、授業の目的は「教科書を終えること」となるのが必然だった。同様に、年度当初に提出する「年間指導計画」でも、140時間をどう割り振るか、ということだけを考えていた。だから、緻密な授業デザインなど、出来るはずもなかった。

稲岡先生がテストを先に作るのは、自分でゴールを設定されたからだ。しかもそのゴールは、どのような生徒にしたいのか、どのような力をつけたいのか、を目指した、具体的な生徒像をイメージすることができたからだ。なぜそのような姿が描けたのか。具体的なゴールを見定めたからだ。高校入試問題、学力テスト、英検など、一般化された「求められている力」を総合的に見比べたからだ。私は一体どこを見ていたのだろうか。なんとなく「英語ができる人」の姿を、なんとなく思い浮かべ、なんとなくどんな力が必要なのかしか見ていなかったのではないだろうか。それは、生徒がどのようなことが嬉しいのか、を考えていなかったことでもあり、どんなことができる中学生を求めるべきなのかを見ていなかったことを意味する。具体的にかみ砕くことをせずに、その場しのぎの努力でごまかしてきた結果に過ぎなかったのだ。この罪は重い。

しかし、学習指導要領でねらいを知り、教科書の統合的な活動ができるようにするための指導の積

み重ねを見つめた今は、少し違って見えている。例えば、定期テストでは類似問題を段階を追って難化させ、語数を段階的に増やし、条件は逆に緩やかにし、生徒の発想が活かされる問題が望ましい。したがって、普段の授業から彼らの想像力や発想力を鍛え、使える文のパターンを少しずつ増やし、繰り返し習熟させていくことで、テストに備えさせていく流れが見えている。そうすると、日々の授業で取り組む内容も必然的に絞られ、授業での継続性を作ることができる。これが「学びの往還」ということである。私の授業で足りていなかったのは、この連続性であり、学びをスパイラルにつなげていくための計画性だったのだ。

このように考えていくと、単元計画はそれを具体化するために行うという意味づけができ、単元ごとのつながりにも必然性が見えてくる。稲岡先生はそれを「鷹の目」で事前に明確にし、どこに向かうかの行き先を見定めたとうえで、日頃の授業をされていた。いや、稲岡先生だけではなく、教師としてすべきことがこの積み重ねだったのである。そしてそれを支えるのが、生徒の「今」を知り、彼らに学びの価値づけを行っていく「蟻の目」による指導だった。私は、自らの不十分さを具体的に知った。

【マイアクション】

ゴールは、具体物から算出する。そのゴールを達成させるために必要な力を整理し、テストに配置し、テストで「できた」を経験させる中で生徒に自信をつけ、「もっとできるようになりたい」という気持ちを育てる。

(2) 「蟻の目」としての実践の在り方

大きなくくりで言えば、「蟻の目」も鷹の目の一部なのかもしれない。なぜならば、細部をつなげていくためには、鷹の目が必要だからである。しかし、「蟻の目」は蟻の目らしく、地面からしか見えない視点や視座で物事を捉えられる。それが「生徒理解」である。稲岡先生は日常から生徒の様子をよく観察し、一人一人と関係をつなぐことに傾注されていた。そして、それをベースとして、授業で身近な話題を提供し、生徒の関心が持てる教材として活用されていたのである。午前中の水泳の授業から話題を始め、誕生日や部活の大会に話題を広げ、最終的にALTからのメッセージとして、自分の夏休みの計画について考えさせる。どの話題も中学生の生活範囲にある日常であり、だからこそ、生徒は自分事として捉え、それを英語で表現することで「できる自分」を見出せるのである。それは生徒の目線の高さで日常を捉える「蟻の目」と、それをつなげていく「鷹の目」のコラボレーションによって出来上がる授業デザインであった。

さらに、用意される「going to」のカードや、張り出される写真にはマグネットが事前に貼られており、授業の中で確実に使用する計画を立てておられた。これは即興的に話題をつなぎながらも、取り上げたい話題に必ず迫っていく、熟練したインタビュアーのような計画性を日常から持たれていることの表れである。私の授業では、予定したことを消化することに必死になり、残り時間が気になり、それでいて、その場で生徒とのやり取りをして話題が別のところにそれてしまい、結局用意していた教材は使わずじまい、ということがよくある。これは中嶋先生が言われる「授業中に教材研究をしなければならない」、ということにつながる。

それだけでなく、稲岡先生は全体指導をしながらも、生徒の活動の様子をよく把握されていた。発表の際に相手に向き合っていない生徒には「Face your friends.」、教師の話を聞いていない生徒には「Please look at me.」、さらには机間巡視をしながらの声掛けやノートへの丸付けなど、マルチタスクにもほどがある。加えて、必ず目を見てからのとびきりの「笑顔」である。生徒としては気が

抜けないというより、いつも気にかけてもらっている安心感で、教師の指示に素直に従う。このような生徒との関係性があるの「あの授業」なのだ。一朝一夕にはなしえない、生徒との日々の積み重ねは、同じ時間を共に過ごしているという、ある種の「共通項」を持っている教師にしかできない仕事である。接触回数が多ければ多いほど、人は親近感を感じる、という心理学の「単純接触効果」があるが、まさに稲岡先生がされていたのは、どんな生徒とも短時間でも接触することを増やし、生徒との距離を縮めることだった。ただ、授業を拝見して感じたことは、そういう効果を「ねらって」やっていたということではなく、生徒とつながりたい、生徒のことをよく知りたい、生徒のことがかわいくて仕方がない、といったような「愛情」が自然とそうさせていた、ということである。

このように考えていくと、教師が授業で大切にしなければいけないことがよくわかる。学校が学校である意味は、テストで点を取れるようにすることも大切なことではあるのだが、それ以上に、社会で人と関わりながら「生きる」ということはどういうことなのか、を経験させる、ということなのだ。私は英語教師であるから、それを、「コミュニケーションとはこうするのだ」、「言葉を使って人とつながるといことはこういうことなのだ」ということを、体中で示す必要があるのだ。だからこそ、コミュニケーションを教える側の人間が、生徒一人ひとりとコミュニケーションを取っていない、ということ自体が、ありえないことなのだ。

担任をしていて、教室の全員と言葉を交わすことは、人数が多くなればなるほど、困難である。しかし、全体指導をしながら、一人一人と目をつなぎ、「私はあなたのことを見ている」というメッセージを送りながら、全員との関係性を築いていくことも可能なのだ、と稲岡先生は教えてくれた。私はまた、自分の不十分さを知った。

【マイアクション】

生徒一人ひとりと本当の意味でつながり、生徒のことをよく知る。そして、知っているからこそできるアプローチを授業に生かし、生徒が「自分事」として捉えられる授業づくりにつなげる。

蒔田先生や稲岡先生の授業を通して私が学んだことは、「自分が教師であることの意味」であった。お二方の授業を通して、「教師であるからこそしなければいけないことは何か」、「教師でなければできないことは何か」、そして、「それを自分ができているのだろうか」、という根本的な問いを感じていた私は、このレポートをまとめる中で、自分自身の課題に気が付いた。表層的な教師としてのタスクをより良くこなすこともそうなのであるが、深層的な教師であることの意味を再度考え直す必要があったのだ。

稲岡先生が取り組まれていたのは、そして、蒔田先生が取り組まれていたのは、「人間を育てる」ということであった。これは、中嶋先生がよく言われる、「彼らは英語を教えていません。」というお言葉通り、どのような人間になってほしいのか、という、教師の理念を明確に表す教育の姿だったのだ。私はこれまで、生徒に何を教えてきたのだろうか。多くの先生方が、振り返りのレポートの中で、現在地を反省されておられる。オンライン塾のアドバイザーの先生方でさえ、今を変えるために、マイアクションを更新しておられる。そのような姿に刺激を受け、私はまた、教師として生きる覚悟をすることができた。「見える視界の高さ、広さが問題ではない。自分から見ようとする、その姿勢が問題だったのだ。」

教員経験20年を迎え、自らの立ち位置に疑問を感じ始めていた私に、今回の学びはとても大きな意味があったと感じている。中嶋先生を始め、中嶋塾の皆さま、オンライン塾の皆さま、中嶋先生からご紹介いただく先生方との素晴らしい出会いに感謝し、私はまた、教師として生きていく決意をした。

中嶋先生、この度は、大変貴重な学びの場をいただきまして、心から感謝しております。ありがとうございました。今後ともご指導よろしくお願いいたします。